

選集を解く<sup>ほど</sup> 1)

——国立療養所大島青松園で結ばれたキリスト教霊交会の歴史記述——

阿部 安成

## I

国立療養所大島青松園で信仰の証を生きる人びとの団体の1つに、キリスト教霊交会がある。その結成は1914年のことという。香川県木田郡庵治村の大島に、法律第11号「癩予防ニ関スル件」などが定める療養所が設置されてから5年後のときだった。現在、ハンセン病をめぐる国立療養所は13か所ある。どこの療養所にも複数の宗教団体があるなかで、大島青松園の霊交会は、キリスト教の信徒団体として4番めに長い歴史をもつ<sup>2)</sup>。

霊交会より創立年次が古い3つの教会がどういった刊行物を出版していたのかわたしは知らない。霊交会は逐次刊行物や記念誌の編集や発行に長けた会員を擁し、機関紙『霊交』は1919年から1940年まで継続して発行され、創立から50周年と80周年のときに記念誌を刊行し、また、現存する『霊交』の調査と整理がほぼ終わったところで、その復刻版（リプリント）も制作したのだった<sup>3)</sup>。

創立50周年の記念刊行物が『霊交会 創立五十周年記念誌』（笠居誠一ほか編集委員、大島青松園霊交会、1964年）で、創立80周年のときには、かつて刊行された『癩院創世』の再版がつけられた。後者の書は、霊交会会員でもキリスト教信徒でもない療養者の土谷

---

1) 本稿は2012年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」と2012年度受託研究「国立療養所大島青松園園内歴史資料保存・公開・活用プロジェクト研究」の成果の1つである。

2) 『全国ハンセン病療養所内・キリスト教沿革史』（日本ハンセン病者福音宣教教会、1999年）を参照。

3) 2010年に制作された『霊交』復刻版は全6冊とそのデジタルデータを収録したDVDのセットとなった。

勉が編んだ、大島でのキリスト教伝道史だった<sup>4)</sup>。霊交会の歴史は、逐次刊行物『霊交』に掲載されたいくつかの記事においても顧みられたことがある。機関紙紙上での連載記事として霊交会の歴史が執筆されたものの、1冊の書籍としての刊行はさきにあげた2冊のみだった。

もっとも、厳密にいうと『霊交会 創立五十周年記念誌』と『癩院創世』の2著は、霊交会の歴史を記した史誌そのものとは、いくらかずれている。『癩院創世』には霊交会やその創設者たちについての記述があるが、会の歴史というよりは、信徒や宣教師を軸とした伝道と信仰の展開をたどった内容といつてよい。そして、『霊交会 創立五十周年記念誌』は、記念誌というのだから霊交会50年の歩みを記した通史のようにみえるかもしれないが、書名に「史」の文字がないこの図書は、霊交会員や関係者による追想録によって構成されているのだった。

内容や構成がどうであれ、この2著はいまも霊交会の会員によって、会の正式な歴史書、いふならば正史としてあつかわれているのである。さきに記した2010年の霊交会機関紙復刻版の制作においても、この2著は特別な図書として機関紙とともにデジタル撮影され、そのデータを元にしたリプリントがおこなわれた。

霊交会は2014年に創立100周年をむかえる。大島の療養所がその設置から100年の年月を経て、在園者数が男性42人、女性41人、平均年齢80.6歳となつたいま<sup>5)</sup>、島の歴史、療養所の歴史、教会と信仰の歴史をその当時者みずからが記したり編んだりしたりすることがむつかしくなっている。この厳しさのいま、霊交会の歴史を書こうとするとき、どうしても当事者ではない外部のものが介入する必要がでてくる。また、霊交会の歴史を知るための手立ても、ずいぶんと整えられてきた。そこでいま、かつての史誌を再読しようとする試みが本稿で展開される。

---

<sup>4)</sup> 当初の予定では前掲『霊交会』と『癩院創世』とを1つの稿で論じる予定だったが、つごうにより、前者を本稿で、後者を「物語を解す」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第4号、2013年3月刊行予定)で論じることとなった。

<sup>5)</sup> 2013年1月1日時点の数値(「大島青松園入所者数・年齢別数等概況」『青松』第70巻第1号通巻第668号、2013年2月)。

くりかえせば、いまのところ、通史という型をとるのであれそうでないのであれ、霊交会やそこに集った信徒たちの史誌はさきの2著以外にはない<sup>6)</sup>。したがって、とってよいただろう、これらの2著を参照したり引用したりした研究論文はまずなく、随筆などの稿もほとんどないのである。

そこで本稿では、霊交会創立50周年を記念して刊行された『霊交会 創立五十周年記念誌』をとりあげて、霊交会の歴史を書くときの論点を示すこととする。

## II

まず、『霊交会 創立五十周年記念誌』（以下『五十年誌』とする）の書誌情報と構成を示そう。編集委員は、笠居誠一、赤沢正美、塔和子の3名。いずれも大島の歌人として知られた在園者である。発行所は「大島青松園 霊交会」となっている。会の名称は、「大島基督教霊交会」「キリスト教霊交会」とまちまちあったなかで、さきのとおり奥付に記されていた。印刷と発行の年月日は、「昭和三十九年十一月十一日」。11月11日が霊交会の創立記念日である。総ページ数67、判型は変形20.9cm×15.0cmの小冊子である。表紙には、教会堂を南から撮った写真が掲載されている。特徴のある三角屋根と小さな鐘楼がはっきりとわかる構図の写真だ。霊交会創設者のひとりである三宅官之治と宣教師エリクソン夫妻の石碑もみえる。2013年のいまとくらべると、教会堂図書室の窓のあたりに梅の木がなく、すっきりとした印象をうける。他方で、『癩院創世』に掲載された写真に照らすと、図書室窓と玄関や鐘楼のようすがずいぶんと違う。

表紙には教会堂の写真のほかには、「霊交会」「創立五十周年記念誌」「1964」の文字がみえる。会の名称の表記には、「靈」のみ旧字が用いられている。わたしの印象では、ここにある「靈交」という明朝体の活字が、一時期の機関紙『靈交』の題字と同じであるように

---

<sup>6)</sup> 機関紙『靈交』の現存するすべての号をみわたしたうえで、そこになにが記されているか、それらからなにがわかるか、そしてなにを考えるのかについての論点を走り書きした稿を前掲『靈交』復刻版に寄せた。この稿は、阿部安成「史伝としての『靈交』—大島療養所の基督教霊交会の機関紙を史料化する」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.132、2010年5月）としてWEB公開している。

みえた。こうした再生といってよい使い回しは、過去にもその事例があり、『靈交』の編集をおそらく創刊から廃刊のときまで一貫してひとりで担った長田穂波が亡くなったそのあとで、彼を偲んで制作された、『穂波追悼』と題された活版刷りパンフレットが、すでに廃刊となり用いられることのなくなった『靈交』の用紙に印刷されたことがあった<sup>7)</sup>。あらためて『五十年誌』表紙と『靈交』題字の文字「靈」をみくらべると、微妙な違いがあるもののほとんど同一にみえた。

表紙をめくった見開きページには、右に「詩篇二三」からの転載があり、左に「目次」が配されている。ここに目次から執筆者と題目をあげよう。

河野進「記念誌によせて……詩」、石本俊市「靈交会五十年の歩み」、野島多以司「靈交会五十年記念に寄す」、青木恵哉「恩寵の回顧」、小野宏「靈交会創立五十周年をかえりみて」、海老沼健次「五十周年を共に喜ぶ」、塔和子「復活考……詩」、岸野ゆき「靈交会誕生」、芥今代「ありし日のことども」、岩本花子「信じる喜び」、半田市太郎「小さき群」、笠居誠一「道」、秦伊三太「私の捧げもの」、森タカノ「神への奉仕」、吉田・山田・太田井「俳句・短歌」、藤田英夫「導かれて」、芝清美「コーラスグループ」、林庶吉「教会学校の歩みを省みて」、三好夏子「私と夏期伝道」、東条康江「主とともに」、蓮井三佐男「二人の兄弟」、籠尾ひさし「聖書を求めて」、脇林潔「学ぶこと」、赤沢正美「石」、長田穂波「この火燃えたらむには……詩」、上野春雄「在りし日の長田さんと起居を共にして」、三宅清泉「靈交会創立二十五年記念日を迎えて」、岡本雅之助「故三宅官之治大兄の横顔と連想」、角川一行「靈交会の現況」、「靈交会創立以来の主なる事項」、「あとがき」。

目次では、海老沼と塔の稿のあいだと、赤沢と長田の稿のあいだに、区切りの線が引かれている。靈交会所蔵の同書には、「海老沼健次」のところに鉛筆で下線が引いてある。目次に掲載された31名のうち8名が女性である（塔和子、岸野ゆき、芥今代、岩本花子、森タカノ、吉田美枝子、三好夏子、東条康江）。大島在住者はもちろんのこと、しかも療養者たちがいうところの「役所」のひとつも執筆者に雑ざり、さらには島外からの寄稿もあり、

---

<sup>7)</sup> 阿部安成「死んだ穂波の横顔に一長田穂波探索」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.130、2010年4月）を参照。

物故者の旧稿が転載されたところもある。

### III

本書編集の理念や方針を探るために、最初に「あとがき」をみよう。編集委員3人の連名による「あとがき」から、2つのことが読める。1つは、大島における霊交会の歴史、あるいは霊交会の元でのキリスト教信仰史というべき変遷の概括、もう1つが本書編集の骨子である。前者については、つぎの記述がある。

癒えることのない悲しみと絶望がのたうち、弱い者はぼろぎれのように、かえりみられなかつた状況の中で、「三宅さんは、ええ人じやがキリスト教がすかん」と云われた言葉が示すように、キリスト者であることを指差されながら、神の愛を実践し、幾多の迫害と困難に打ち勝ち、主をほめたたえ祈りつづけて開拓したとの隔離という排除をされたそのさきにも、信仰を捨てないがゆえの逆境があり、それを打開しようと努め、祈りつづけてきたと来し方への自覚がみせられる。ここで唐突に、しかも文意がいくらか混濁しながらも、しかし、霊交会会員にとって、あるいは大島の療養所に暮らすほとんどのひとにとってすでに周知のことがらだった、霊交会創設者のひとり三宅官之治（清泉）の人物評がここに持ちだされている。キリスト教は忌避されるが、その信仰集団を率い、また療養者の総代にも選出されそれをみごとに務めた、人徳と人望のひと三宅への仰慕である。すでに三宅が没してから20年以上が過ぎたこのとき、霊交会会員がみずからの信仰や難儀打開の実践を説くなかで、過去のひとと追いやることなく依然として三宅は生きつづけていたのである。

もう1つの、本書をどのような構成として編集するのかについては、五十年の歩みを堅苦しい記録で埋めるのでなく、少しでも親しみをもつて読んでいただくために、多くの兄弟姉妹の随想や証詞によつて、さまざまなことを語っていただきました。

と開陳されていた。さきに目次のところでみたとおり、このときの霊交会代表の石本が「霊

交会五十年の歩み」と題した稿を、本書の代表らしい位置に寄せていて、もちろんそれは記念誌に不可欠の稿であり、そうした稿を実質の巻頭に掲げる敬意を表しはするが、しかし、そうした稿ばかりでは「堅苦し」く「親しみをもつて読」まれにくいので、当事者や関係者による「随想や証詞」に多くのページをあてたということである。こうして創立 50 周年を記念して、選抜された当事者と関係者が寄稿した<sup>アンソロジー</sup>選集が編まれたのだった。当事者も関係者もそれぞれにみずからの言葉で創立 50 周年を祝い、来し方に思いを馳せ、会のようす、病友や信徒とのつながり、信仰のこころ、難儀と愛と祈りに思いをめぐらせたのだった。

「あとがき」と奥付のある最終ページは、それらが左に、右に「霊交会創立以来の主な事項」掲載された見開きとなっている。右ページのおもな事項を列挙したという一覧は、霊交会創立以来の歴史をあらわす年表にほかならず、これはまた、23 筆の箇条書きで構成された霊交会の通史でもある。かんべんな年表がそうであるとおりに、これも事項の出典を明示してはいない。とりたてて不思議なようすではないが、霊交会の創立年をめぐる本書と『癩院創世』の記述が、のちの霊交会創立 80 周年をめぐる記念事業において、霊交会代表を悩ませることとなる。

それはともかくも、この年表は、「一、大正三年十一月十一日、五名の兄弟によって創立する」に始まって、長田穂波の編集によって『霊交』が創刊されたこと（1919年）、集会を屋外でおこなうときに使える天幕の寄贈、「バラックの祈の家」の建設、鉄筋コンクリート造の教会堂建立（1935年）、「一、昭和十五年六月一日、会、創立以来、代表者としてのその任を負ってきた、三宅官之治兄にかわり、石本俊市兄就任する」、エリクソン夫妻の帰米、「一、昭和十五年、特高課の干渉と圧迫により、十二月号第二六五号をもって「霊交」誌を終刊する」、といった事項があがっている。全 23 筆のうちの 6 筆は「召天」記事で、三宅（1943年）、「恩師宮内岩太郎先生」（元職員、1944年）、長田（1945年）、「恩師 S・M・エリクソン先生」（1946年）、「林文雄先生」（医官、1947年）、「藤原力先生」（1958年）の逝去が年表に記録された。三宅とエリクソン夫妻を讃える記念碑建立が、「河野進先生の御

発起と御尽力」によったこと（1949年）も載り、この年表は、いまも、「一、聖日礼拝、毎夕の祈り会は、創立以来休みなくつづけている」こと、「一、昭和三十九年八月十五日、現在に至るまでの召天者百二十二名」、「一、昭和三十九年八月十五日、現在の会員数、求道者をふくめて六十五名」と伝えて、記述が終わる。

この23筆のいわば骨格を整え、それに肉づけをしてゆくと、霊交会の通史が仕上がる。霊交会はそれをしなかった。さきにみた、それでは読むに親しまれにくい「堅苦し」さを発するという理由だけでなく、推察するに、おそらくそれを担う執筆者や編集者がいなかったからなのだろう。

霊交会50年の歴史が23筆の箇条書きで手短かにまとめられ、霊交会の通史は抄録となった。しかもこの年表が本書末尾におかれたところに、やはり、「堅苦しい記録」を避けようとした姿勢がみえる。

#### IV

本書掉尾の年表で、三宅とエリクソン夫妻の記念碑建立を発起し、かつそれに尽力したと記録された河野進の寄稿が、本書冒頭ページノンブル2と3におかれた。これは、霊交会を三宅と穂波に代表させつつ、会のおおまかな歴史を詠みこんだ祝詩である。実質の巻頭稿はそのつぎに掲載された、霊交会信徒代表の石本による「霊交会五十年の歩み」だ。「あとがき」がいうところの、まさに「堅苦しい記録」とみなされかねない「五十年の歩み」そのものにほかならない。ただ、5ページというそう多くはない紙とに、ですます調の口語の文体が「堅苦し」さを緩めているようでもある。

1903年生まれの霊交会代表石本は、このとき還暦を過ぎたばかりの年齢だった。彼は1919年来島し、その翌1920年に受洗した、三宅も穂波もじかに知る信徒だった<sup>8)</sup>。霊交会の初期を知り、しかし設立の場にいたわけではない石本は、「霊交会五十年の歩み」の冒頭につぎの1文をおいた。

---

<sup>8)</sup> 1979年10月に逝去した石本の追悼号（『青松』第37巻第2号通巻第356号、1980年2月）に掲載された「故石本俊市略歴」による。

わたしたちの霊交会は大正三年（一九一四年）十一月十一日に、三宅官之治兄、長田嘉吉（穂波）兄、江木長助兄、横井武夫兄、川越鹿七兄のわずか五人の兄弟たちによつて創立されたのであります。

——会創立の年月日と創設者5人の名を明記した石本は、あわせて、「青松園の中で団体を組織したのは霊交会が最初」だと、大島療養所内の団体における霊交会の位置もみせた。所内の草分けの団体を創始したもののたちの名を明らかにするところから始まった会の歴史記述である。

療養所そのものが「無秩序、無統制」の「暗黒時代」だったと回顧された当時、キリスト教を信仰する団体には、「きびしい迫害と嘲笑」がむけられた。「大正十年頃にも一部の悪質煽動者のために、他の宗教が連合して大迫害を起したこと」があった。このとき「霊交会員は十七名ばかりでありましたが、ひるむことなく、ブリキの十字架に赤い布を貼りつけて作った手製の赤い十字架を胸につけて、一見して霊交会員であることがわかるように態度をあきらかにして日常勇敢に戦つたもの」だとの受難と克服の歴史が記された。

ここにみえる、キリスト教信徒にして霊交会会員であることがだれにもすぐにわかるように、また、信仰と結団の意思をあらわすためにつけたという手づくりのブリキの赤い十字架については、ほかのテキストにはみえない記述である。いまこの現物は残っていない。

冒頭4段落めで早くも創設者たちの死が伝えられる。江木、横井、川越の「三者は早く召天」し、三宅と穂波のそれについては年月日まで記された。「三宅兄、長田兄亡き後の霊交会は自滅し、消えて無くなるように陰ではいつていた者もあつたそう」だとの伝聞を記すとともに、それが彼ら二人の名望は会の内外を問わず広くゆきわたっていたことの証となっている。三宅と穂波の逝去はまさに第二次世界大戦のさなかとその敗戦の直後だった。この「多事多難」なときをのりこえられたのは、石本にとっては詩篇23篇の聖言による励ましと導きだったという。本書表紙つぎのページに掲載された聖言である。

ついで、「霊交会の会則」があげられる。

一、会長にはイエス、キリストを戴くこと／一、会則は聖書をもつて会則とすること／



一、会務は会員の全体責任とすること／一、集会を尊ぶこと／一、献金をすること  
会則はもとより1つなのだろうが、たとえば、『癩院創世』や機関紙『靈交』に掲載されたそれとはいくらか文言が異なる。ただし、その精神や理念に違いはない。

会則に籠められた原理にのっとり運営された靈交会が二人の会員によって代表される。それが三宅と穂波で、この二人をとりあげて靈交会をあらわすようすは、さきの河野の祝詩も同じだった。石本は、三宅は「愛の人、円満な人格者でありましたから一般入園者からも「おつさん」の愛称で親しまれ、信頼と尊敬とを一身に集めておられ」と讃え、穂波は「信仰詩人として独学ながら有名な「靈魂は羽ばたく」ほか詩集、随筆集など大小十五著書を出版され、中には英訳出版された「燃ゆる心」もあり、「このほかに原稿盗難通知二原稿、紛失せし原稿もあり、トラクト二頁版のもの四十五程あり」と長田兄の著書目録の終りに記入してありました」とその多作ぶりを仰ぎみた。

ここで石本の稿から離れて、靈交会を代表するひとりと想起されている穂波の著作にふれておこう。石本はかつて穂波の追悼号として編まれた手書き手づくりの「回覧雑誌」である『青松』第17号（1946年1月）に、「追悼感話」と題した稿を寄せた。これは穂波の葬儀のときの読みあげられた原稿のままか、もしくは、そのときの稿を元に記された文章とおもわれる。そこで石本は穂波の著作を14冊あげ、ついで「尚この外に原稿盗難通知二原稿、紛失せし原稿もあり、現に出版準備中のもの二冊、トラクト二頁版のもの四十五種あり。と彼の著書目録の終りに記入してある」と記していた<sup>9)</sup>。『五十年誌』に寄稿した文章はこれとほぼ同じで、自分のかつての稿を参照して記したのだろう。『五十年誌』の方が1冊多くなっている穂波の著作数は、おそらく彼の歿後に刊行された遺稿集をふくめて数えたのだとおもわれる。いまだに穂波の著作は、そのすべてがみつかっていない。公共図書館などにも所蔵がなく、大島にもない。靈交会や大島の療養所のなかでの穂波の位置からすると、不思議なことと感じる。

さて、石本は、穂波の執筆能力の記載を、つぎに引用した会機関紙発行の記述につなげ

---

<sup>9)</sup> 石本の「追悼感話」と『青松』穂波追悼号については、前掲阿部安成「死んだ穂波の横顔に」を参照。

た。

「霊交」誌は大正八年に長田兄の編集により毛筆で第一号を十部発行しました。翌九年にはS・M・エリクソン宣教師から謄写版の寄贈を受けて謄写版刷りとして出し、大正十五年十一月号からは宮内岩太郎先生のご斡旋により、高松市の印刷所にて印刷発行することになりました。その「霊交」誌も、戦時色が益々濃厚になるにつれて特高課のうるさい干渉と圧迫とにより、強いて発行をつづけると、わたしたちは兎に角として、園長先生はじめ園当局にご迷惑がかかることをおそれついに昭和十五年十二月号第二六五号をもつて終刊とするのやむなきにいたつたのであります。

現在、この毛筆を用いた手書き紙面の初期の号も、1920年から謄写版刷りとなった号も1922年9月号までが残っていない<sup>10)</sup>。正確には終刊ではなく「廃刊」となったその要因に、本書巻末年表と同じく「干渉と圧迫」の語が用いられている。くりかえされたその語は、廃刊から30年を経ようとするこのときにあらためて蘇った、当時の憤懣を発出しているかのようにみえる。

第二次世界大戦後にこの『霊交』が再刊されることはなかった。おそらく創刊以来一貫してその編集と発行を担った穂波が、1945年12月に死去したからだろう。1973年7月15日付で霊交会は、『大島霊交会週報 霊交 復刊』をタイプ印刷で発行する。「霊交 復刊」の文字がみえはするが、紙面構成、記事内容、発行方針のいずれもがかつての『霊交』とは異なっている<sup>11)</sup>。

石本の記述は、ついで、霊交会創立以来の祈りの場所、テント寄贈、バラック建立、教会堂の寄贈などを伝える。こうしてみると彼の手になる「霊交会五十年の歩み」が、本書巻末年表の骨格を整え肉づけした手短な霊交会通史となったといえよう。しかも通史を描こうとすると、「霊交会の五十年史を語らんとするとき、どうしても自然に三宅兄、長田兄のことを語らねばなりませんので長くなりますが」との自覚があることを石本は明かして

10) 現存する号の目録を前掲阿部安成「史伝としての『霊交』」に収載した。

11) この『週報』については、阿部安成、石居人也「後続への意志—国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.116、2009年9月)の石居執筆分を参照。

いた。それでも石本は、「祈りの人、信仰の人、愛の人」だった三宅についても、また穂波についても記すことをずいぶんと抑制したようにもうかがえる。できるだけ親しみをもって読まれるように「堅苦し」くならないようところがけたという『五十年誌』の編集方針は、霊交会代表が執筆した巻頭稿にも徹底していたのである。

ただどういうわけか、石本は先行する史誌である『癩院創世』にふれていない。それどころか『五十年誌』は、あとでみるとおり 1 箇所をのぞいて、同書に目配りすらしていないのだ。『癩院創世』は、穂波が執筆した三宅の伝記原稿が穂波歿後に刊行されずにそのままになっていることを知った療養者の土谷勉が、それに穂波やエリクソンのことを書き加えて上梓となった大島での伝道と信仰の書である。その元となった穂波の原稿を土谷に伝えたその当人が石本だった。このことについてはまたあとで述べよう。

## V

石本のつぎに掲載された稿の執筆者は、「園長 野島多以司」。彼の名は泰治のはずで、このときなぜさきの表記を用いたのかはわからない。

野島は 50 年という「長い年月」をふりかえり、「日本のライ療養所の歩いた、五十余年の歴史の道」と、ほぼ同じ長さとなる「霊交会五十年の歴史」を重ねあわせる。野島の大島療養所着任は 1927 年のことだったという。そのときすでに「月刊誌として毎月発行されていた『霊交』をとりあげて、「編集者長田穂波氏の毎月の苦労は大へんなものであつたらうと今でも思いや」る。穂波の「心臓障害で逝去」した末期をめぐっては、

死の直前私の心臓は人一倍強い筈ですがなどと冗談が云える程の余裕があつた。死後の長田氏の写真が適度に髭があつて画で見るキリストそっくりであつたことも不思議なことであつた。

と記した<sup>12)</sup>。死後のようすをキリストに喩えられて穂波が喜んだかどうか。もちろんそれはわからないが、会則にも会長をイエス・キリストとして、信徒であり会員である自分た

---

12) 穂波の遺影については、前掲阿部安成「死んだ穂波の横顔に」を参照。

ちと会長とをはっきりと峻別していた穂波たちであれば、自分たちがキリストに似ているなどという感慨は思いもよらなかったように感じる。野島は死に顔そのものではなく、遺影に写ったそのようすを「キリストそつくり」といつていた。こうした感想は、園長ただひとりが書き残していた。最大級の賛辞ということなのだろう。

教会堂まえに三宅とエリクソンの記念碑があることは年表にも記載されていた。野島はくわえて、1944年の「戦争きびしい」ときに、かつての事務長で当時は高松の教会の牧師となっていた宮内岩太郎が、「三宅氏の石碑を庵治石に刻んで岡山下の三宅氏の郷里に建設された」ことを、「今以て忘れることが出来ない」「厚意」と記した。少なくとも霊交会をとおしてみると、こうした島外との交流をいくつも書きとめることとなる。「賀川豊彦先生、田中耕太郎前最高裁判所長官、矢内原忠雄元東大総長」たちが島を訪ねただけでなく<sup>13)</sup>、講演をしたこともあり、「霊交会あるが故に普通ならば到底御迎え出来ない、我が国有数の識者をお迎え出来たことも数知れ」ず、「それが又会員のみならず病友、職員の精神的な肉となり、慰安となつたことも有難いことである」との感謝をみせ、「エリクソン御夫妻、モーア御夫妻」たち「外国宣教師の方」とのあいだの交流にも「感激」や忘れられない「御恩」を野島は感じたという。

こうした著名人や宣教師との交わりであれば、園長でなくほかの関係者でも記せようが、「修養団」については、この時点では野島しか記録できなかつたようだ。

終戦前病者職員に修養団支部があつて、霊交会員も此の宗教宗派を超越した愛汗運動を推進してくれ、此の運動を通じて蓮沼門三先生はじめ多くの同志をこの島にお迎えし、社会の多くの同志との交遊が行われ、病友全部が戦争の困窮時代に精神的に物質的に救われた事も多大なものがあつた。終戦後病者の修養団運動は一応なくなつたが、病者に代り私はひきつづいて現在でも其の永生会員であり若い職員の中には今も尚その共鳴者がある。

---

<sup>13)</sup> 矢内原の大島訪問については、阿部安成、石居人也「無教会と愛汗一大島青松園キリスト教霊交会の2つの精神」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.121、2009年12月)を参照。

——修養団大島支部の代表は療養所長が兼ねたから野島そのひとの役となった。ただし、支部報の編集と発行など実質の運営は穂波が担っていた<sup>14)</sup>。野島は自分がこの時点でも修養団の永生会員だったというのだから、ただ素直にかつての修養団運動についてふれたのだろう。「総親和」「総努力」「相愛」を呼号した修養団は、戦争が連続してゆく1930年代に人びとを皇国の民としてまとめあげる役割を担った。第二次世界大戦後の大島では、この修養団による活動が急速に忘れられてゆくなかで、ひとり野島だけがこの時期になっても、みずからが代表として支部を率いた修養団を想起したのだった。このことはまたあとで述べよう。

園長の野島は、教会堂寄附をめぐる逸話<sup>エピソード</sup>も明かしている。いまも使用されている教会堂は1935年の竣工で、エリクソン宣教師たちの尽力によって米国のミッション・トゥ・レパリー(MTL)からの寄附によって、滋賀県近江八幡のヴォーリスが設計して建ったことが知られている。この寄附をめぐるのは、「最初長島愛生園で嫌われ、大島へ寄附されるときまつたとき県、内務省で心配したことは当時としては立派な鉄筋であるから、建物故に他の各宗教との間にトラブルが起らないかということであつたが、「そんな心配はない」と私、霊交会並に他の宗教関係者が共に言明したイキサツもあつた」とのことだ。

## VI

くりかえせば、親しんで読まれるようにと堅苦しい構成や内容となることを嫌った編集方針の元で本書は編まれ、ありきたりの通史であることをまぬかれた記念誌となった。巻末年表を骨格としてそれにいくらかの肉づけをした歴史が霊交会信徒代表の石本によって執筆され、そこには記されなかつたいくつかの逸話を園長の野島が補った。

---

<sup>14)</sup> 修養団については、阿部安成「大島の生、島をめぐるレターズ—香川県大島の療養所を場とした知の動態」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.109、2009年4月)、前掲阿部安成、石居人也「無教会と愛汗」、阿部安成「島の書、書の園—国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第2号、2011年3月)を参照。

つづく寄稿者の青木恵哉は大島の人びとにとって懐かしい名だったかもしれない<sup>15)</sup>。霊交会創立の10か月ほどまえに大島に来た青木は創立当初の会員ではなかった。霊交会がつくられてから10年ほどで大島を離れた青木は、『五十年誌』刊行当時には国立療養所沖縄愛楽園にいた。そのころをふりかえった青木は、「私たちは祈りの伏兵である、福音の伝道戦線にあつて誰にも知られない、隠れた所にあつて一人静かに祈る祈りも主は知り給うと励まし合ったり、祈りの灯台としての使命に燃えて祈りつづけた」と過去のようすを記した<sup>16)</sup>。

青木はいくつかの重要な記述を『五十年誌』に贈った。1つは、霊交会の命名。さきに記したとおり、霊交会結成当初の記録がなく、だれが、どのようにしてこの会名をつけたのかがわからなかった。いまの霊交会会員たちも、そうした原初の事情を知らないのである。青木のいうところは、「霊交という会名はその頃、宮内先生が御発案になり、霊の交りは祈りの交りと一つで、信仰的意味はもつと深いことを教えられ私たちは祈りの使命を新たに感動したことも記憶に残つて居る」と、会名の発案者がかつて大島療養所の職員でありキリスト教信徒で、のちに高松の教会の牧師となった宮内岩太郎だったと伝えた。また、「最初は無論、日基〔日本基督教会——引用者による〕だけで進もうとしたが、それではいけないことに気づき、先生もそれに御同意下さつて、何れの教派にも片寄らない、自由なものにし、それがまた会員の祈りを高めていくによく」と記し、「何れの教派にも片寄らない」という霊交会の方針を定めるにあたって、先生の後押しがあったと報せている。ここにいう先生は宮内を指す。

そして青木もやはり、三宅と穂波をあげて霊交会の歴史を想起した。ただ彼はそれだけでなく、「霊交会が出来て最初に亡くなつた、Tさんのことも印象深い」と、「鉄火場廻りの

---

15) 青木については、山口文哉「〈渡り〉が拓く〈もう一つの社会〉—後原〈隔離所〉時代の青木恵哉」(『山口県立大学福祉社会学部紀要』第15号、2009年3月)、同「屋部〈隔離所〉時代の青木恵哉」(同前第16号、2010年3月)を参照。

16) ここにいう「伏兵」は大島の療養者とそこをふくむ複数の療養所を訪問した矢内原とではその語に籠めた意味が違っていた(阿部安成、石居人也「聖書の生—国立療養所大島青松園キリスト教霊交会という交流の場所」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.164、2012年3月)を参照。

経歴もある」が「熱心になり、何ものにも恐れる色なく、集会に出席した」ひとのこと、石本、高木、山本、「そして当時、江本と改名していた私」の4名が「霊交会の四本柱」といわれたことを記録した（執筆する方は周知のことを記すのだから、会員の名をあげるにあたっては姓のみのばあいがあり、同姓が複数いればそれがだれかを特定することがむづかしい）。

この当時は東京の国立療養所多磨全生園にいた小野宏も、島の外から霊交会の歴史をふりかえった。彼は、過去の「迫害の魔手」を伝えた。「福音伝道に熱心」だった「宮内事務長」をめぐる「騒動」、「迫害の陣頭に立ちました O 氏は園内の親分格」だったことなど。

かつての療養者だけでなく、『五十年誌』には園長の野島にくわえて、当時分館長だった海老沼健次の寄稿もみえる<sup>17)</sup>。彼自身も「自称クリスチャン」とのことだ。

## VII

1930年に大島へ来た半田市太郎は、穂波が作詞した霊交会会歌を引用して（「霊交会歌」があとのページにみえる）、「小さき群」と題した稿を書き始めた。「現在私は盲人となつてゐる」という半田は、霊交会入会時にも10名ばかりの盲人がいたこと、そのなかの山形兄が初代表となつて「現在の青松園盲人会」の母体が1932年5月に発会したこと、「そのころの盲人会と云えば、柱を背にしてわいせつな話に明け、食うことだけが楽しみの明け暮れといった、味気ない療養生活で、一般晴眼者からかえりみられない下積みの日々であつたことも、否めない事実であつた」と負の過去を省みた。

他方で半田は、大島に来た当初の「自治」をも伝えた。

昭和六年正月、四百名の入園患者が待遇の改善と、人権を認めよと、一斉に立ちあがり、十名の実行委員が選出されたが、その中に小野（現在多磨全生園）、石本、大川兄等と顧問として三宅大兄の四人がはいつており、特に石本兄は、実行委員長としての重責を背負わされたが、忠実にしかも其の大任を果たされた功績は、青松園の歴史に特筆大書す

---

<sup>17)</sup> 大島の霊交会の宿泊施設霊交荘にはこの海老沼が寄贈した折りたたみのテーブルが1台いまでもあり、会食のたびに使われている。

べきものであると思う。三月八日に患者自治会が生れ、療養生活も遂次改善されながら協和会の名のもとに今日に至っているが、長期間にわたり協和会の総代や顧問として、あるいは役員、また青年団婦人会の幹部として、霊交会員の人々が協和会につくした働きと、果たしてきた役割は決して小さいものでなかつたと思う。斯く為さしめた神の偉大な愛と聖業を心から感謝するものである。

——ここには大島の自治をふりかえるなかで、それを指導し牽引してきた先導者が霊交会会員だったのだとの自負があらわれている。

編集委員のひとりである笠居誠一は、「書くのが目的ではな」と断りながらも自分の「病気の事」と霊交会の歴史を記した。自分の身体について「本病」について記す最後に、「医学の進んだ、現代では癩も治る病気になって居ります。現在青松園の患者の約半数は無菌者であります。医学的に言うなら治癒者であります」と病の現状を告げるとともに、「もし身体の何処かに紅い斑紋が出来るとか、マヒの処がありましたら人に知られないうちに、早く病院にくる事をお勧め致します」と説いている。ここにはひとまず、治る病になった現在も、治癒者となつたいまでも、なぜ療養所にいるのかの説明はなく、入院すなわち隔離の勧めが大島青松園在園者によって示されている。

ここでべつの稿をみれば、やはり編集委員のひとり赤沢正美が記した「ささやき」というコラム（まさにこの記事には囲みがある）は、島本兄の回想をおもな内容として、その終りに、「ライが不治でなくなつた現在、遠からず療養所はなくなるであろう。風光明媚な青松園はレジヤの島になるかも知れない。何れにしても此処に、療養所があつてライを病んだ人々が生き、死んでいつたことや、キリスト信者の小さな群れが幾十年かの風雪を、祈りつづけ賛美しつづけて一日も絶える日のなかつたことは、ライの歴史と共に残り、伝説めきながら語られるであろう」との見通しと予想と小さな期待ともいえよう心性をみせている。

さて、笠居は自分の稿の最後を教会の鐘について記してしめくくった。「バラツクの祈りの家」にも小さい鐘がつけられ、その後の教会堂建立の1935年に「アメリカの教会から寄贈



にな」ったという。

霊交会の鐘は時間がよく合うて居るからと、部屋の時計も霊交会の鐘に合わすと言う人もありました。今もこの時間は忠実に守りつづけて居ります。

と会員の誇りの証としての鐘が記され、「音響管制」の戦争中を経て、「終戦後は、前の如くに礼拝集会と夕べの祈り会には鐘を鳴らして居ります。今後も青松園に霊交会がある限り、毎夕島空に教会の鐘は鳴り渡ると思います。否鳴らさねばなりません」との決意も示されていた。

いまこの鐘は聖日礼拝のある毎週日曜日の朝 9:15 に正確に鳴り始める。この鐘の音をわたしは、霊交荘でも東海岸でも西の棧橋でも聞いたことがある。おそらく、島のどこにいても聞こえる、アンプリファイアやスピーカーをとおさない、数少ないひとが鳴らす音だろう。

岡山県の長島には国立療養所の邑久光明園と長島愛生園がある。その長島の聖書学舎に学ぶ林庶吉は、大島の「教会学校」をふりかえった<sup>18)</sup>。その創始や詳しい沿革を林は知らないようだが、1957年9月末から1963年12月29日の「教会学校を閉じるまでの間、いわゆる教師の最後としてその席を汚した」という経歴の林による教会学校の回想である。日曜日に開かれていたこの教会学校の運営者は、穂波、石本、そして医官の林文雄などで、たとえば穂波の日記にもSS (Sunday School) と略記されて日曜の教会学校が登場する。信仰にかかわりなく、「入園した子供たちが一人の例外もなくここに学」んだのだが、「年少少女が一人も居なくなつた為に閉校の必然に至」ったのだった。

赤沢の「石」と題された稿は、「私は石が好きである」との好みを示され、ついで、霊交会教会堂まえのエリクソン夫妻と三宅を讃える碑石に話題が移り、エリクソンの思い出が語られ、みずからの信心の告白となる。多くの寄稿者がふれたとおり、やはり、霊交会というと、三宅、穂波が「創立以来の偉大な柱」で、それにエリクソン夫妻と宮内岩太郎がくわわり、彼ら4名が他界したのちは、霊交会は石本によって「支えられ」たととらえら

---

<sup>18)</sup> 霊交会教会堂図書室の書架には、この林の日記がある。在園者の日記が残る例は大島では少ない。

れている。そうした先人たちを偲ぶ稿のなかで唯一、赤沢の「石」だけが土谷の『癩院創世』に言及していた。「三宅さん、長田さんを書いた土谷勉著「癩院創世」」のなかから赤沢は、エリクソンについての記述を参照し、エリクソン、あるいはエリクソン夫婦を顕彰し、また懐かしむ稿となっていた。

エリクソン夫妻と三宅の記念碑建造の「発起」と「尽力」の役を果たした河野進の詩が「五十年誌」冒頭に掲げられ、ほとんどの会員に霊交会の創始者として想起されるだろう穂波と三宅の稿の「抜粋」が本書の後半に転載された。

## VIII

さきに記したとおり本書の目次には2本の線が引かれて、その構成を区分している。第3の領野にあたるページが、穂波と三宅の稿の転載と、彼らふたりについての追想録などとなる。

『靈魂は羽ばたく』(1928年)から転載された穂波の詩は、「火が欲しい……火が！／焰々と燃ゆる火が！」に始まる。「人生は冬なんだ」「全く凍死しさうだ」とあらわされる「冷たき地上」は「上」にある「火」と対比され、「上より聖霊の火の降臨を」「上よりの火を投げ入れ給へ」との希望が語られる。この詩は、「この火燃えたらむには」と題されていた。1928年の刊行である穂波の著書は、療養所内から活版刷りの図書を発刊した例として最初に位置するだろう。同書は1940年(日曜世界社)と1975年(ろばのみみ編集部)に復刊あるいは復刻されている。穂波は自分の精神や思索をあらわすときの語として「火」を好んだようで、1930年刊行の詩集は『靈火は燃ゆる』(光友社)と題され、本書にもくりかえし登場するエリクソン夫妻のひとりロイス・エリクソンが英訳した詩集の邦題は『燃ゆる心』(教文館、1938年。原文のままの英題は *Storys of lepers by the Inland sea*) とつけられ、活版印刷による逐次刊行物に掲載された穂波の最後とおもわれる連載詩の題が「灯火を翳せる者」(『清流』1942年～1944年)となった<sup>19)</sup>。

---

19) 阿部安成「長田穂波の聖一消えゆくものども」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series hodoku)

穂波はまた、「寒冷は火の如く人の肉をタバラス」との印象深い言葉を記している。それは霊交会機関紙の『霊交』に連載された、穂波と三宅がともに執筆した霊交会と信仰の歴史をあらわした稿「恩寵の花片」にあった<sup>20)</sup>。

『五十年誌』編集委員はこうした穂波の著述と、それがあらかず彼の思索の一端を熟知していたのだろうか。『五十年誌』にたった1編の穂波の著作を転載するとき、とても適切な選択がおこなわれたとおもう。

穂波歿後20年になろうとするこのとき、彼はどのように追想されたのか。「在りし日の長田さんと起居を共にして」と寄稿文を題した上野春雄は、表題のとおり穂波と生活をともにした在園者だった。上野は穂波のひととなり、日々の起居動作や日課を丁寧にたどりながら、「今も長田さんの話が出る毎に憶い出され慈父のような感じがしてなつかしんでおります」と稿を結んだとおり、彼の追懐は穂波の像を「慈父」と造形した。『五十年誌』刊行からさらに50年が過ぎようとするいま、穂波を直に知るものがいなくなった大島では、おおよそこうした造形にあわせて穂波が想起されている。

上野が記録した穂波のようすをみよう。穂波と同じ寮に入るまえの伝聞では、「話をしたこともなく実際とつきにくい人ではないかと思っていた」ところ、「始めてあつた時なんとなく物やわらかい親父さんの様な感じがし」たし、「寝食を共にして見ると案外親しみのある好々爺さんで、私にはなんとなくこの部屋に移つて来てよかつたと思」えるほどの親近感を抱けるひとだったという。読書と筆耕のひとであっても、気むずかしひとではなかつたようだ。穂波の読んだり書いたりするようすは、

長田さんはいつも部屋の玄関の窓辺の机の前に座り、ある時は読書や指のない手にペンをはさませてそれを頬で支えて原稿等をよく書いておりました。何分手が悪いので頬にペン<sup>〔たこ〕</sup>脛<sup>〔たこ〕</sup>が出来ていたのを記憶しております。

とのこと。手でうまくペンを支えることができず、頬にペンを当てて書くため、頬のそこ

---

No.131、2010年5月)に全文掲載。

<sup>20)</sup> 阿部安成「寒冷は火の如く人の肉をタバラス—療養所に生きてゆくこと」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.134、2010年7月)を参照。

が硬くなってしまったという、穂波を語るときによくいわれる逸話である。

穂波の「日課」は、早朝に庭の築山のうえでおこなう「冷水摩擦」。これは「どんな寒い朝でも素裸」で「雨の日も風の日も一日として欠かした日はなかつたようです」とまわりの病友も感心していたのだろう。穂波が「時間を大切にし、よく守っていた」ようす、そうした穂波が「指のない手で、器用にネジを巻き」「部屋の掛時計の時間を合わせるのは長田さんの受持ち」となったことが語られる。そうした穂波はまた、「気短かな処も」あったようで、しかし、「忍耐強い処も日々の生活の上で解るような気がしました」ともふりかえられた。

「慈愛深い中にも、且きびしさも」あり、「大変子供を可愛がっていた」ところもあり、「時にはユーモラスなことを云つて部屋を明るくしてくれることも」あった。第二次世界大戦の戦時下には、「冷静な判断と行動」で不自由舎のものを避難させたり空襲に備えたりしたこともあり、「特に憶い出されるのは防空壕へ避難する時でも必ず聖書を始め重要な物の入ったカバンを片時も肩にかけて離さなかつたものでした」と、「信仰のふかい態度」も想いおこされる。戦時下には島の療養所でも「互いに落ちつかない毎日がつづいた」が、1945年8月15日の天皇のいわゆる玉音放送に接した穂波は、「威儀を正して東方に向い黙禱して」いた。その日を過ぎると「園内でもなにか気がぬけたような生活が敗戦の翌日から始まり、「だれもが不安と落ちつきのない明け暮れ」だったところ、穂波の「日常生活にはなんの変動も見られなかつた」と看取され、「それは読んだり書いたりしていて他の者には無関心なような明け暮れ」だったという。

傍からは8月15日を過ぎても、みずからの読書と筆耕に専念する、それまでと変わりのない日常を生きていたようにみえた穂波も、少しずつ、静かに、深く変容を遂げようとしていた。わたしはそれを蟬がその殻から抜け出すような変身に喩えて「蟬蛻」と形容した<sup>21)</sup>。穂波と起居をともした病友は、それに気づかなかつたのだろうか。

回想のなかで「慈父」と仰ぎみられた穂波にも、「部屋のひとには宗教のことなど一度も

---

<sup>21)</sup> 阿部安成「癩と時局と書きものを―香川県大島の療養所での1940年代を軸とする」(黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010年)を参照。

話したことは」なかったとの一面があったと伝える上野の記録は希少である。こうしたようすを「今から見れば平々凡々の親父さんに過ぎなかつたよう」だとの穂波像は、子どもたちを可愛がり、日曜学校を担い、「少年寮の子供に童話等を話していたよう」だとの彼のすがたと重なるところもあろう。とはいえ、

長田さんが書いたり読んだりしている時、賑やかに雑談をして耳ざわりの時でも、嫌な面ひとつしなかつたことは矢張り忍耐と寛容の持主であつたことが、寝食を共にして見て始めて私には判然とわかりました。

とは、慈父にして克己と鷹揚のひとつとして穂波を伝えている。たとえ「一年足らずの短い生活」だったとしても、起居を、寝食をともにしたという療養者の記録は、そうした穂波像を大島在住者たちのあいだに強固にかたちづくることとなる。

三宅は穂波ほど多作な執筆者ではなかつた。『五十年誌』には、彼が『靈交』（1938年11月10日）に寄せた「靈交会創立二十五年記念会を迎えて」と題された稿の「抜粋」が転載された。三宅は靈交会創立記念日の11月11日にあわせて、その月に発行された『靈交』にしばしば記念の稿を載せ、そのたびに会と信仰の歴史をふりかえり、人びとに感謝を伝えていた。刻苦を忍ぶ信仰の生活が、その歴史に充填しているのである。

三宅を語る岡本雅之助は、三宅に「わが子同然に愛されながら、起居を偕にする生活」をおくった療養者である。岡本は、「風貌魁偉な大入道の老人」、寮での通称が「おつさん」だったと三宅を伝える。「靈交会にとつても、一粒の麦として会員にとつては親のような存在なんです、患者の自治会としても顧問ということ」と信仰と自治の先達者としての三宅がひとのために尽くしたようす、ひとに「宗教雑誌」を読ませて聞いていたようすを報せる。ひとに読ませて聞くと、三宅自身が聞くというよりは、そのひとに読ませるところに主眼があつたとのことだ。「雑誌は無教会派の先生のものが多く、たとえば、矢内原忠雄先生の「嘉信」、塚本虎二先生の「聖書知識」、斉藤宗次郎先生の「基督信徒の友」、その外黒崎幸吉先生、内村鑑三先生のもの」があつたとのこと。このなかの『嘉信』などは、いまも靈交会教会堂図書室にあり、図書室には矢内原から三宅に宛てた献辞の記された寄

贈書や矢内原たちの揮毫のある『聖書』もある<sup>22)</sup>。

ひとのためにからだを動かし、「食事に対する不満」を口にしたことはなく、他方で「無類のあわて者ぶりを発揮することでそのユーモラスなしぐさに、みんなを爆笑させたもの」との一面もあり、三宅の信仰はというと、「まこと、おさな子のような信仰という言葉があてはまる、純粋さであった」との感心が寄せられ、また、「こと善悪の区別については、峻厳そのもの」との感嘆のうちに三宅が想起された。「三宅さんは、人を起用するに、最良の場所を与える才に秀れていた」「どんなむづかしい問題が起つても、おつさんが顔を出すとみんなおさまるんですよ」という評価は、三宅が長期にわたって療養者の総代をつとめた履歴ゆえであり、またそうした歴任を裏づける技量の指摘でもある。

三宅は「臨終の床」で付添いのものに「聖書の朗読を要求」し、「それは、いつも詩篇二十三篇に決っていた」という。告別式に用いる聖書も遺言で決まっていた、それも詩篇 23 篇だった<sup>23)</sup>。本書冒頭での「詩篇二三」の転載には、この書を三宅に捧げるとの意思が籠められていたのだろう。土谷勉を著者とする『癩院創世』も、その元の原稿をたどれば、穂波による三宅の「伝記」とのことだった。霊交会の歴史にかかわるわずか 2 つの著書である『五十年誌』と『癩院創世』は、どちらも三宅という会の創設者を深く想起する場となっていたのだ。

三宅を回顧し讃える稿の末尾には、彼の辞世の歌が転載された——「地のことは土に残して我はいま天津御国へ行くぞ嬉しき」。この歌は『癩院創世』には、「地のことは土に遺してわれは今天津御国へ行くぞ楽しき」と記載されてあった。

霊交会を動かしたまさに両輪と喩えてよい三宅と穂波の回顧と賞讃に、『五十年誌』は多くのページを当てたのだった。

---

22) 『嘉信』など逐次刊行物の蔵書目録は、前掲阿部安成、石居人也「無教会と愛汗」を、霊交会蔵書の図書目録は、阿部安成「国立療養所大島青松園キリスト教霊交会蔵書について—香川県大島の療養所を場とした知の蓄積と発信」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.107、2009年3月)を、塚本、黒崎、矢内原たちと霊交会会員との交流の一端は、前掲阿部安成、石居人也「聖書の生」を参照。

23) 岡本雅之助「遺された讃美歌」(『藻汐草』通巻第 100 号第 12 巻第 4 号、1943 年 5 月)。

## IX

さきに記したとおり、『五十年誌』への寄稿者31人のうち8名が女性だった。目次に引かれた2本の線による区切りによって3つに分けられた編は、第1が霊交会にとっての重鎮、第3が物故者とそれを追悼するもの、そして霊交会の歴史に当てられ、第2の編にはいわば一般会員の稿が配されたとなろうか。その第2の編の執筆者は20人で、そのうち8名が女性となると、もともと女性が少ない療養所において、本書の構成は女性の占める割合がとても高くなっている<sup>24)</sup>。ここでは女性たちの稿を読もう。

女性のページは、塔和子の詩に始まる。いまや大島でもっともよく知られた在園者といったらよい塔は、霊交会の会員であり、この『五十年誌』を編集した委員のひとりでもあった。「復活考」と題された彼女の詩は、「土の中で腐つたものは／新しく始まるための終りであつた」「腐つたものの中から／生命はもえ出て」と書き起こされた。穂波も北条民雄もしばしば自分たちの肉体が腐ると表現していた<sup>25)</sup>。塔の詩も自己の肉体または生命の復活や再生を歌っていたようか。

つぎに「霊交会誕生」の題で寄稿した岸野ゆきは、1909年5月の初めに「入所した一人」だということから、大島にやってきた最初期のひとりとなる。彼女はキリスト教の信仰を「浮浪者を煽動して妨害」した職員などを、その名をあげて示す。「きびしい条件の中から、きびしく信仰に生きようとする群が生れ」たとの回想が主調の霊交会史となっている。

岸野も石本同様に霊交会創設者5人の名を記し、ひとりずつの印象をあげてゆく——「三宅兄の人となりについては、全く愛の人で、重病者の世話をし、相談あい手をし、患者から、職員の方から頼みとされ親しまれたひと」であり、霊交会を迫害から守ったのも、「こ

---

<sup>24)</sup> 仮に比較するための数値を提示すると、2013年1月1日の時点での「明治42年(1909年)4月1日開所以来の入所者延数」における女性の比率は24.4%となる(前掲「大島青松園入所者数・年齢別数等概況」)。さきの女性執筆率は40.0%とはるかに高い。

<sup>25)</sup> たとえば、北条民雄「鬼神」「無題II」(北条民雄『定本北条民雄全集』上、東京創元社、1996年)、穂波執筆とおもわれる稿で「編輯後記」(『霊交』第6巻第6号、1925年)と「編輯後記」(『霊交』第238号、1938年9月)がある。

の三宅兄の人徳によつた」のであり、「三宅兄の信仰の広さとおゝらかな愛は誰にも比較しえない温いもの」だったと回顧された。

「聖書研究に専念し、一般信者に聖書の講義をして、教え、多くの人を導いた」穂波。すでに「宣教師のもとでコツクとして働き、キリストの僕として働いていた」川越鹿七、「誰がみても病氣らしくなく、小さな斑紋が二つあつた程度だつたと云う。一度島を脱走して全生園でキリスト教に入信し、再び島に帰つてきた人」江木良助、「捨てられた少年だつたと云う。出生地も、肉親の事も、自身の姓名も知らず、仮収容所に居た時、そこに勤められていた横井と云うお婆さんが、横井の姓をなのらせ、名は武ちやん武ちやんと云われていた事を覚えていて武夫と名づけられたと云う。島に入所してから、三宅兄に面倒をみて貰つていた」横井武夫——こうした 5 人が霊交会創設者だった。大島での開所当初から療養所にいた岸野は、彼らを知っていた。そうした療養者ならではの記述となった。

開設の当初は、「療養所とは名ばかりで浮浪者の収容所でしかありませんでした。ばくちはうち、喧嘩はするといつた具合の乱れた生活」のなか、自分も博打をしていた身ながらも、山形に教会へ誘われ、青木恵哉に文字を習い、霊交会に入って博打が罪であると知るようになったと、芥今代はわが身をふりかえる。「私は無学なもので聖書のみことばの、意味が充分にわかりませんが神様は必ずいらつしやることだけは、かたく信じております」——これが芥の感慨だった。

10 歳で大島に来て、しかしすでに母がいたので「少しも淋しい事」がなく、すぐに霊交会に入り、そして洗礼をうけ、しかし「成人となつてからは」あらためて自己の信仰を省みて、「己れを愛する如くに隣人を愛し、隣人の幸福を祈」るようになると、「信じる喜び」を岩本花子は述べた。

目がみえない森タカノは、おばあさんやおじいさんの「奉仕」のようすをふりかえる。「女身」の題で 7 句を詠んだ吉田美枝子の 1 句「山茶花散華キリストはおのこにて」15 文字には、なにが籠められていたのだろうか。自分の入信への経緯、そして夏期伝道をとおして霊交会をあらわした三好夏子。「いくつかの試練」を経て、「そうした苦しみに堪える力と



サタンの誘いのうち勝つ力とを神より与えられて今日に至りましたが、十字架に至る道は険しく厳しいものです。自分自身の思いや、力では到底歩み行く事の出来ない道です」と信仰の意義を説く東条康江<sup>26)</sup>。

わたしはここで、彼女たち8人の女性が、その性ならではの記録を、その性ゆえの稿を『五十年誌』に寄せたから、その内容が貴重なのだといたいのではない。想起した過去を記す機会が女性に多くなった霊交会の機能を確認しよう。霊交会会員に占める女性の率を40%とする調査がある<sup>27)</sup>。この高い女性の組織率がおそらくそのまま『五十年誌』における女性の執筆率につながっている。大島の逐次刊行物をあげると、霊交会には機関紙『霊交』、自治活動の機関紙『報知大島』、園内の総合誌ともいべき『藻汐草』があり、いずれも1940年代にその刊行が止んでしまい、その後には、『藻汐草』の継続後誌といってよい活版刷り『青松』や、1954年には盲人会による逐次刊行物『灯台』もようやく創刊された。これらにはおおむね女性の寄稿が少ない。『霊交』紙上でもそれは散見されるていどだった。『報知大島』は婦人会の動向を伝えるも、婦人会による逐次刊行物はいまもって確認されていない。女性療養者が書く機会は、大島ではとても少なかったのである。『五十年誌』の編集委員だった塔和子も、その刊行時にはまだ『はだか木』(河野睦子、1961年)1冊しか詩集を上梓していなかった。

もとより、『五十年誌』が女性寄稿の唯一の機会だったわけではない。それにしても、男の場所だった療養所で、女性たちが集い、議論し、思索し、それを表現する機会はとても少なかった。1964年発行の『五十年誌』はその希少な機会となった。そこにあらわされた

---

<sup>26)</sup> この康江夫婦を「出演」者としたドキュメンタリー・フィルム『61ha 絆』が2012年に公開された。このフィルムの監督は「康江さんはそうした絶望や悲劇を乗り越えて、現状を肯定してきた」「この二人には何か乗り越えた力がありますよね。だからとても爽やかに見えるんですよ」と語った。このフィルムをめぐるキーワードは「乗り越えた」「爽やか」だが、そうした印象と信仰についてフィルムは充分にとらえていない。教会での礼拝や讃美歌はただの背景としてのみ映っているようにみえる。フィルムの監督や観覧者はさきに引用した康江の言葉をどう読むのだろうか(阿部安成「わたしの知らないあのひとの姿―ドキュメンタリー・フィルム『61ha 絆』批評」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.184、2013年1月、を参照)。

<sup>27)</sup> 前掲阿部安成、石居人也「後続への意志」所収の石居の稿を参照。

稿を、女性ゆえの繊細な感性があらわれているといった浅薄な形容で讃えることはやめよう。そのためにはっきりと釘を刺しておくことが、ここでのわたしの1つの役割である。

さきに注視した吉田美枝子の「女身」をもういちどみよう。「山茶花……」以外の句をあげると、

寒椿寂しと見れど燃ゆるなり／冴え返る夜はひざまづく女身われ／雛の夜潮騒となり遠  
のくもの／喜雨となる夜や充実の時来たる／静かなる焰数多の蛾を焼きて／翅合す秋蝶  
祈るかたちにて

どの句にも女性ならではの感性といたくなる仕掛けが潜んでいるようだ。さきの「山茶花」の句は、どう詠むのだろう。さざんかさんげ、キリストは、おのこにて——なのか、あるいは、さんちゃばな、さんげキリストは、おのこにて——だろうか。散華という仏法の用語とキリストは並ぶのか。俳句の素人がへんにいちると火傷するかもしれないが、吉田の句は破調が魅力だ。散華とキリストも破調。

ぼとり落ちた山茶花から散華を連想し、ああ釈迦牟尼もイエスも男だった、とあらためて気づく。冷え切った夜にひざまずいてふと、ああわたしは女だったと、あらためて気づく。ひっそりと咲くかのような寒椿も、よくみると燃えるような色を発している、静かに燃えるかのような焰も、いくつもの蛾を焼いている——彼女は当たりまえにあるようななにかから、べつななにかへと変わりたかったのか。蝶の翅に手をあわせる祈りのかたちをみたように、いまあるそれとはべつななにかを求めていたのだろうか。そうしたところ魅かれる句も、女だから詠めたと理解する必要はない。

男の場所だった療養所に生れた信仰の結びつきがあり、そこは女にも確かな座席のある居場所となった。女もいる会が歴史を想起するとき、そこには女も書く紙幅があった。わたしたちはそれを知った。だが、女にも、女も、女も、とくりかえし記すところに彼女たちをエキストラと扱ってしまう感性の落とし穴がある。彼女たちは、いったいいつになると、女たちは、女たちが、と当たりまえのように記せるのだろうか。

## X

『五十年誌』は、霊交会会員が会と信仰の歴史をたどる場となり、あわせて寄稿した1人ひとりにはわが身の来し方も顧みることとなった。それは苦難や迫害や試練をとおした信仰の証の記録となり、わが身と会を代表する三宅や穂波とを重ねあわせてみる機会でもあった。だがそれは、欠けるところのない通史を連綿と記載することではなかった。彼ら彼女たちにとって大切な過去をたどればよいのであって、もはやほとんどみな忘れてしまった修養団のことを記す必要はなかった。確かにかつては多くのものが、修養団の標語を記した鉢巻をつけた。それもいまや手にすることなどなければ、修養団の蓮沼門三も高橋昭道も霊交会の人びとにとって想起すべきひとたちではなく、彼らよりは奉仕に尽くしていたおばあさんやおじいさんのことがふりかえられる。修養団の機関紙を穂波が編集していても、穂波を回想するにそれも、また、穂波の入れ墨も霊交会とみずからの来歴をたどるにあたって必要のない情報となった。

ただ、なぜ『癩院創世』がほとんど参照されなかったのかは、よくわからない。それはしかも石本が病友の土谷勉に、穂波の原稿を貸すことによって一書にまとめられたのだから、『五十年誌』にならべられるべき史誌となってよさそうなものなのに、石本は一言もそれにふれていない。三宅や穂波を回顧するとき、その書にふれずに済むのだった。『五十年誌』刊行から30年後には、『癩院創世』がそのときの信徒代表の曾我野一美によって再版されることとなる。その曾我野も『五十年誌』にはまるで姿をあらわさない<sup>28)</sup>。

記述の不在ということであれば、当時の全患協（このときの正式名称は全国国立療養所ハンセン氏病患者協議会）や予防法をめぐる闘争のことも『五十年誌』にはほぼ登場しない。そのいくらかの例外が脇林清の稿「学ぶこと」である。彼は、「ハ氏病療養所の転換

---

28) このとき曾我野は霊交会会員ではなかったのかもしれない。曾我野はまた自治活動を石本から継ぐこととなる次世代の在園者でもあった。その曾我野も2012年11月に亡くなった。2013年4月発行の『青松』が曾我野追悼号となる予定なので、そこに掲載されるであろう年譜を待った方がよいかもしれないが、ひとまずの憶測を書いた。曾我野が『青松』に寄せた稿の目録を追悼として作成した（阿部安成「散文のひとー国立療養所大島青松園在住者の死」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.182、2012年12月、に収録。なお目録は石居人也との共作である）。

期、新時代の到来、云々」と、云われ始めて数年余りになります」と稿を記し始めた。この稿で脇林がいう「不当な差別処遇」も「病む立場にある者の人権を守る」も過去のことではなく、その稿を記している現時の事態を指している。脇林は厳しくも、「内側から一人一人切実に求められてしかるべき、回復へのたゆまぬ努力はなれば放棄されているようです」と指摘した。掉尾に「大いに活かして学ぶできます」と記して稿を閉じた脇林は、創立50周年という機を、それまでの信仰の証を唱えて祝福するにとどめずに、こののちにむけた自分たちの学修の課題を掲げたのだった。転換期、新時代ゆえに課される転身である。

最後に、2013年のいまからほぼ50年まえの霊交会を知る記録として『五十年誌』を読もう。「霊交会の現況」と題された角川一行の稿が年表のまえにおかれた。このときの会員65名で、「全入園者の約一割」だという。霊交会の会員数は、いつのときでも、だいたい全在園者の1割くらいだと、現在の霊交会会員からいくどか聞いたことがある。だいたい言い継がれてきた会の紹介なのだろう。このとき、「其中軽症者は十五名、残りの五十名は不自由者であり、其の中の十一名は盲人であります」という。このようすを、「全国の療養所教会でも不自由な者の多い教会ではないかと思えます」ととらえてみせたところに少し驚いた。

さきにみた現在の在園者数からすると、霊交会会員は8名くらいとなる。いま日曜日の礼拝に教会堂までのぼってくるひとは、この数よりも少ないだろう。

この1960年代中葉のころには、毎夕の祈り会も引き続きおこなわれ、出席者も10名くらいはいたとのこと。この祈り会のために毎夕の鐘が鳴り響いたともいう。「この祈り会が創立以来休むことなく守られておることは、生きて働き給う主が、今尚小さな霊交会に与えて下さる大きな恵みであることを覚え、感謝しております」とも記されていた。いまこの祈り会は止んでいる。おこなわれなくなってから久しいのではないだろうか。

わたしは2000年代に入ってから霊交会のようすを、ほんの少し知っているにすぎない。それでも、50年という時間の長さを、深く感じ入る。

なお、霊交会が所蔵する『五十年誌』には、「霊交会創立五十周年記念礼拝順序」と題された1枚の紙がはさまれてあった。司会は石本、前奏と後奏は木村花子先生、祈りは半田、挨拶石本、祝辞野島園長、祈り岸本、祝禱モーア先生、とみえる。

さきにみた「霊交会の現況」の執筆者の角川は、霊交会の副代表だった。1958年3月から霊交会に副代表がおかれた（前掲石本「霊交会五十年の歩み」）。彼の名は「すみかわ」と読む。文字が残り、当時を知るひとがいなくなると、彼の名が読み誤れる機会が増えるだろう。時の隔たりとはこういうところにあらわれてゆく。



2012年12月29日撮影 霊交会教会堂南側の建物が取り壊され、教会堂がよくみえるようになった（左）。教会堂を撮るときに好まれるアングル（右）。